

夫が、母が、「身体拘束」されそうになって

藤原瑠美

博士 医療福祉ジャーナリズム

木原育子先生の乃木坂スクールの講義の参考資料は圧巻であった。

2024 年 9 月 18 日付けの東京新聞に載った木原先生による日本精神科病院協会会長の山崎学氏をインタビュー。タイトルは「身体拘束続く理由」。山崎氏の写真と短縮された言葉が小見出しに並んでいる。

写真の山崎氏は眼鏡が鼻に下がり、大きく開いた右手が身体の前方に出ている。去年 83 歳だった氏が赤裸々に話し、それが 6 つの小見出しにまとめられている。

山崎氏は語る。「身体拘束の議論が進むのはいいが、現場としては法律に沿った形で拘束しているだけ 当然じゃない」。「精神科病院より一般病棟での拘束の方がはるかに（身体拘束が）多い。知らない（の）？」。

いや違うと私は思った。

身体拘束は、人間として辱めを受けることだからだ。

2019 年 7 月に私の 83 歳の夫が大森赤十字病院に肺炎で入院した。当時会社勤務を退職していた私は夫が退院するまでの 23 日間、夫の病室に寝泊まりすることにした。病院は 83 歳の夫を身体拘束するかも知れないと私は予測していた。夫には身体拘束なんてさせたくなかった。

案の定、入院 2 日目に看護師から身体拘束の同意書のサインを依頼されたが、私が病室に泊まることで免除してもらった。

認知症の母が身体拘束をされたのは 1993 年のことだ。母は肺炎に

なり、3週間入院した時、入院初日、私が家に必需品を取りに帰るため病院を離れた時、母の手が縛られた。

病院に戻り、病室に近づくと母の泣き声が聞こえた。部屋で縛られている母を見た時の辛さは忘れられない。私は病院にゴザと布団を持ち込む許可を得て3週間母の病室に寝泊まりして、会社に通った。日中は母の付き添いを知人に頼んだ。

家族が拘束されている姿を見るのは心が痛む。ましてや精神科病院に入院している患者への身体拘束は想像を絶する。

私はこれまで4回ほど東京八王子の山間部の精神病院を見学している。八王子に今も20軒近く存在している精神病院群をくまなく車で視察した。精神病院が建っている周辺は人気がなく空気が違う。大学院に入学した年に2度ほど友人の車で一日かけてくまなく八王子の精神病院巡りをした。木原先生の資料に登場する滝山病院のあたりが最悪であった。

「胸が痛むようなことはしていない」と精神病院の経営者である山崎学医師は語る。

「僕は長期入院しているのは幸せだと思う。患者は病院の至れり尽くせりのケアを長期に受けて感謝している。」と語る。

国連が日本の精神病院を批判していることに関しては、「余計なお世話」と言いきる。

その山崎学氏こそ、身体拘束はすべきでないと、考え直してもらいたい。